



令和6年度
第34回島根県雲南市

永井隆 平和賞

| 入 | 賞 | 作 | 品 | 集 |

島根県雲南市教育委員会

目次

Contents

小学生低学年の部

- 最優秀賞 どうやったら「如己愛人」になれるかな
優秀賞 そばにいてくれてありがとう
佳作 ことばのかがみ
佳作 ことばを大せつにするってどんなこと

島根県・雲南市立三刀屋小学校
島根県・雲南市立掛合小学校
島根県・雲南市立掛合小学校
島根県・雲南市立鍋山小学校

富^{とみ}田^たそら
原^{はら}七^な菜^な
藤^{ふじ}飛^{とび}結^{ゆい}翔^と
藤^{ふじ}原^{はら}瑠^る々^る

小学生高学年の部

- 最優秀賞 「許し」
優秀賞 人とのつながりと大切な思い
佳作 届けよう折り鶴と愛
佳作 お祈りならどこへでも

東京都・目黒区立田道小学校
島根県・雲南市立掛合小学校
長崎県・長崎市立山里小学校
東京都・星美学園小学校

黒^{くろ}木^き太^{たい}陽^{よう}
田^た柄^{がら}涼^{すず}風^か
金^{かね}子^こ蒼^{そう}楨^ま
吉^{よし}谷^{たに}奏^か音^{のん}

中学生の部

- 最優秀賞 敵も味方もない平和への道標
優秀賞 平和へのバトン
佳作 14歳の私に出来ること
佳作 「愛」を胸に新たな一歩を踏み出す

鳥取県・米子市立後藤ヶ丘中学校
島根県・島根大学教育学部附属
義務教育学校
東京都・玉川聖学院
広島県・盈進学園
盈進中学高等学校

藤^{ふじ}井^い響^{きよう}平^{へい}
片^{かた}岡^{おか}睦^{むつ}深^み
寺^{てら}西^{にし}一^ひ葉^よ梨^り
四^よ辻^{つじ}佳^か穂^ほ

高校生の部

最優秀賞 飛行機に乗って戦争のことを考えた

北海道・北嶺高等学校

平野 宏太郎

優秀賞 祖母の言葉

東京都・セントメリーズインター
ナショナルスクール

陸 颯太郎

佳作 この命を懸命に生きて

沖縄県・KBC高等学院

仲宗根 早紀

佳作 「生きていてよかった」と思える日

広島県・盈進学園盈進高等学校

松葉 悠乃

一般の部

最優秀賞 おいたんのこと

岡山県

前田 有美

優秀賞 秘密を抱えた父の教え

山形県

古瀬 節子

佳作 じぶんごとがつなぐ未来

北海道

井手 隆太

佳作 私たちと「戦争」

兵庫県

堀 晴日

佳作 二つの命日（亡き父の手記より）

島根県

松下 明

作品集の作成にあたり、明らかな誤字・脱字以外は原文のまま編集を行っています。

最優秀賞

どうやったら「如己愛人」になれるかな

島根県雲南市立三刀屋小学校三年

富^{とみ}田^たそ^そら

永井隆博士、どうやったら、博士のように「如己愛人」の心になれるか。わたしも、博士みたいに人にやさしくしたいとずっと思っているけど、なかなかうまくできません。

それは、どうしてもいらいらしてしまうことがあるからです。弟と妹のこと、かわいくて大好きだけれど、言うことを聞かずにわがままを言っているのを見ると、ものすごくいらいらします。他にも、友だちがわざとふざけているのを見て、うんざりと思ってしまうときがあります。そして、心がぐちゃぐちゃになって、わたしもわがままを言って泣いてしまいます。本当は、そんな自分が一番いやです。博士のように人を愛せるようになりたいのにできない。もやもやして、心がうずくまったような気持ちになります。

でも、この前平和の学習で、

「おたがいにくるし合おう。おたがい不完全な人間だから。」

という博士の言葉を聞いて、少し考えがわかりました。不完全って、かんぺきではないということです。だれでもしっぱいしちゃうことがあるし、わたしもみんなもかんぺきじゃないから、わがままを言ってしまったりわかっていないけど、どちらかことをしてしまったりするのかもしれない。

同じころに「カラーモンスター」という絵本を読みました。心にはいろいろな気持ちや感情があって、それがぐちゃぐちゃになって困っているモンスターの心をどんな感情があるのか考えて一つずつ分けていくお話でした。博士が言っておられる不完全というのは、いろんな感情をみんなが持っていて、しようと思っていなくてもいろんな感情が出てきて、ぐちゃぐちゃになってしまうことが、だれにでもあるということなのかなと思いました。

博士の言葉のことを考えていたら、だんだん弟や妹、友だちのことをゆるせる気持ちになって、もしかして甘えたかったのかな、わたしもそういうときあるよと思えるようになりました。それに、わがままなこともあるけどがんばり屋さんだなとか、すすんで発表できてすごいなとか、いいところがあるのかんできました。いらいらしたり泣いたりする自分のことも、そんなときもあるけどいいところもあるよねと思えてきて、なんだか自分の心が晴れたような気持ちになってきました。

博士、人の気持ちを考えたり、いいところを見つけたりしたら、自分の心も幸せになるんですね。もし、だれかのいやなところを見たとしても、心の調子が悪いのかな、どうしてそうしちゃったのかなと考えて、

「だいじょうぶだよ。」

と言って、いいところを伝えて安心させてあげたいです。自分にも同じようにしたいです。これから、どうやったら「如己愛人」の心で人にやさしくできるか考えていきます。博士、がんばるので、見守っていてください。

優 秀 賞

そばにいてくれてありがとう

島根県雲南市立掛合小学校三年

原^{はら}七^な菜^な

私のいとこの家には、「だいきち」というかわいいねがいました。私はいとこの家によく行っていたので、おじいさんが「だいきち」をかわいがっている様子をたくさん見ていました。おじいさんがとてもうれしそうに「だいきち」と遊んでいたのも、私も「だいきち」と仲よくなりたいと思うようになっていました。けれど、私は「だいきち」がこわくて遠くから見守ることしかできない日々がつづいていました。だって、私に向かって、おこったように、「シャー。」と声を出してくるし、足をかまれたらどうしようと不安だったからです。ある時、私はゆう気を出して、「だいきち」にさわってみました。すると、「だいきち」はやさしい目で私を見て、うれしそうにいました。「だいきち」が私に「えらい。」と言っているようにも感じました。やっと仲よくなれた気として私もすごくうれしかったです。家には、「だいきち」といっしょにさん歩しているときの写真があり、とても大切にしています。

せっかく仲よくなった「だいきち」ですが、あるとき、一人でさん歩に行ったとき家に帰ってこなくなりました。その知らせを聞いたときのかなしさは今でもわすれることができ

ません。「だいきち」のいないいとこの家に行くと、おじいさんから、「だいきちはびょう気だったんだよ。」と知らされました。その話を聞いて、だいきちは一人で休みたかったのかもしれない、今ごろだいきちは天国でしあわせにくらしているのかもしれないと思いました。でも、やっぱり大好きだった「だいきち」にいつか帰ってきてほしいとねがっています。

今、私のそばには、大切な家族やペットのうさぎ、そして友だちがいて、楽しく生活しています。ですが、人も動物も命は一つしかありません。「だいきち」のように急にいなくなってしまうことだってあるかもしれません。永井隆先生の学習をして、命の大切さについて考えました。そして、今の幸せな生活に感謝しないといけないと思いました。私のそばにいつも大切な人やペットがいることは、当たり前のように当たり前ではないのかもしれませんが、これからも、当たり前のようにみんなと幸せな生活がくれるように、人の命も自分の命も大切にしていきたいと思います。そのために私は、相手の気持ちを考えて行動したり、感謝の気持ちを言葉できちんと伝えたりしています。いつも、私のそばにいてくれてありがとう。

佳作

ことばのかがみ

島根県雲南市立掛合小学校二年

藤^{ふじ}飛^{とび}結^{ゆい}翔^と

「もうあそばない。」

二年生がはじまってからすぐ、ぼくが友だちに言ってしまったことばです。

今思い出すと、ぼくが一年生のときは、友だちをひとりじめしたり、友だちにこわいことばを言ってしまったりすることが多かったです。ぼくがそんなことばを言うとき、友だちはかなしいひょうじょうをします。そして、ぼくにあまり話をしてくれなくなったり、やさしくしてくれなくなったりします。

その時も、同じように友だちはかなしい顔をしてぼくからはなれました。ぼくは友だちに「もうあそばない。」なんて言わなければよかったと思いました。でも、すぐにはあやまれませんでした。それから数日たってから、自分からあやまってなかなかおりました。ぼくがゆう気をだして「ごめんね。」と言ったとき、友だちはやさしく「いいよ。」と言ってくれました。ぼくは自分がゆう気をもってあやまったり、やさしいことばをかけたりすれば友だちもやさしいことばをかえしてくれるんじゃないかなと思いました。それからは、やさしいことばづかいやこうどうをいしきしています。たとえ

ば、あいてが「あそぼう。」と言ったときには、すぐに「いいよ。」とかえしています。やさしいことばもつかうようにしています。そうすると、友だちもすぐあそびにいられてくれるし、やさしいことばをつかってくれます。ぼくは自分のしたこうどうや、つかったことばは、かがみのように、ぜんぶ自分にかえってくるんだなと思いました。このことは、友だちだけじゃなくてかぞくもおなじです。おとうさんやおかあさん、おとうにもやさしくしようと思いました。

自分もほかの人も、みんながたのしくすごせるように、これから友だちや家ぞくをたいせつにしたいです。

佳作

ことばを大せつにするってどんなこと

島根県雲南市立鍋山小学校二年

藤原 瑠々
ふじはらるる

わたしは、ドッジボールが大スキです。おにいさんおねえさんや一年生といっしょにドッジをするのはとっても楽しいです。

この前の昼休み、なかなかパスがもらえないことがありました。わたしは、「なげたいな。」とずっと思っていました。やっとボールが来て、なげようと思った時、きいくんが、

「パス！」

と大きな声で言いました。「なげたいな。でも、パスしなかったら、わがままって思われるかな。」とまよって、きいくんパスをしました。昼休みがおわると、そのことを思い出してしまいました。何だかいらいらしてきて、きいくん、「なげたかったよ。」

と、ついおこって言ってしまいました。きいくんも、

「ボール、わたしけんじゃん。」

と、おこってしまいました。二年生は、四月にみんなで話し合って、「ことばを大せつに」というめあてをきめました。「わたし、ことばを大せつにできていたかな。」と心ばいになりました。家にかえってから、「明日、何て言おうかな。どんな気もちで言おうかな。」と考えていたら、なかなか

むれませんでした。つぎの日のあさ、バスでいに行く時も、ずっと考えながらあるきました。学校についたらすぐに、きいくんに言いました。

「きのうは、つよく言ってごめんね。わたし、なげたかっただけに。」

「ぼくも、わるかったなあ。」

ときい君が言ってくれました。すごくほっとして、うれしくなりました。

きいくんがおこったのは、わたしがおこって言ったことばで、いやな気もちになったからだと思います。やさしいことばで、自分の思っていることを一生けんめい話したら、わたしの気もちがわかってもらえました。気もちがわかってもらえたと思ったら、とてもすっきりいい気もちになりました。ことばを大せつにするって、こういうことかな。これから、おこったり、いらいらしたりすることもあると思うけど、そんな時も、自分の思っていることを、ていねいに話したいなと思いました。

最優秀賞

「許し」

東京都目黒区立田道小学校六年

黒^{くろ}木^き太^{たい}陽^{よう}

あと一ヶ月で進級する四年生の三月。

僕は、学校はおろか、外出することができなくなった。

その日、学校で起こった出来事は、恐らくいたずらであり、ふざけであったのだろう。しかし、僕は怖くて声をあげることにすらできなかった。

学校へ行けなくなった僕は、どうしたらこの恐怖から逃れ、苦しみから解放されるのかをずっと考えていた。そんな中、母は、いつでも、学校に戻ることができるように、学校の時間割通りに生活するよう工夫した。兄は、学習が遅れないように、勉強を見てくれた。

毎日、作りものの笑顔で、元気であるように、これ以上家族に心配をかけないように、一生けん命がんばった。でも、がんばればがんばるほど、僕の心はずんずんだった。

なぜ、こんなに苦しいのか。なぜ、こんなに怖いのか。そして、なぜ僕は許すことができないのか。夜、目を閉じてても、悪い夢ばかり見た。

母は、

「無理をして許さなくてもいいんだよ。」

と、ぼつりと言った。

そんなある日、父がこう言った。

「どん底に大地あり」

永井隆先生の言葉だった。

もう一度、先生の本を読んでみよう。そう思った僕は、永井隆全集一・二・三巻を、ひたすら読んだ。恐怖と不安を忘れるくらい、夢中になって読んだ。

「ああ先生、許すことは信じていることなんですね。」

これが、僕が導き出した答えだった。

先生の言葉には、一文たりとも人を憎む言葉はない。

どんな悲さんな状況であろうであっても、死の間際であっても、先生は常にだれかを恨んだりはしなかった。どん底にこそ、大地があると、教えてくれた。

この先の人生、恐怖と憎しみの感情に支配されて生きていくのはいやだ。

負の連鎖の中で誰かを恨んで生きていくのはいやだ。

心の中にどす黒い雲をもったまま生きていくのはいやだ。

だから、僕は人を信じるんだ。

今すぐにはできないかもしれないけれど、時間がかかるかもしれないけれど、もう一度、人の心を信じるんだ。

「僕も、勇気を出して一步をふみ出そう。」

そう決意した修了式、三週間ぶりの学校で、

「あの日はごめんね。」

という言葉に、僕はこう答えた。

「僕は信じているよ。」

今、僕は六年生だ。あの日気づいた「人を信じる」という大切な心を、ポケットに入れて元気に学校へ通っている。

優 秀 賞

人とのつながりと大切な思い

島根県雲南市立掛合小学校五年

田 ^た柄 ^{がら}涼 ^{すず}風 ^か

私は、どうして永井隆先生は、亡くなるまで「人」を愛し、「人」のために生きることができたのかな？と疑問に思いました。

永井隆博士は、長崎の原爆投下後、自分も重症を負いながら、自分の命を顧みず被爆した人たちの手当てにあたりました。また、寝たきりになってからは、命の限り本を書き、世界に向かって平和を訴え続けました。永井隆博士の行動や言葉は、いつも「人」のためであり、永井隆博士の「如己愛人」の言葉にも、その思いが表れていると思います。けれども私には、どうしてもそこまで「人」を思うことが出来るのかあまり理解できませんでした。

しかし、総合的な学習で、地域の方と交流する中で、その答えが見つかりました。私の掛合小学校では、五年生が田んぼでお米を育てています。地域の田んぼ名人の藤原さんと山中さんに来ていただき、一学期は、田植えと案山子設置を行いました。「みんなとやると元気が出る。」と言ってくださり、私たちを孫のように思って、一緒に活動してくださいます。私はその二人に質問をしました。「掛合の一番いいところは、何だと思いますか。」と聞きました。私は、五年生の自慢でもある田部竹下酒造や龍頭が滝などの有名な場所や自

然がきつと返ってくるだろうなと思っていました。しかし、藤原さんの答えは、「人の付き合いが家族的なところ」でした。掛合の良さは、場所や自然や食べ物などたくさんあるけど、一番の魅力は、そこに住む「人」なんだと気づかされました。たしかに、私たちが何か活動するとき、いつも地域の人は家族のようにあたたかく接してください、快く協力してください。それが、私にとっては当たり前のことだったけど、それはすごく幸せなことなんだと思いました。

私のクラスは十三人ですが、女子は二人しかいません。男子が多いので、遊びたい遊びが違ったり、話が合わなかったりして、もやもやした気持ちになったり、涙が出てしまったりしたこともあります。それでも私は、他の学級をうらやましく思ったり、他の学校に変わりたいと思ったりしたことはありません。それは、五年生みんなが、私を特別扱いせずに接してくれるからです。「女の子だから」とか、「男の子だから」ではなく、五年生の仲間として、みんなと同じように遊んだり、活動したりしてくれるので、私は毎日楽しく学校に通うことができます。永井隆博士も、私のように、人に愛され、大切にされた経験があったから、「己のごとく人を愛す」ことができたし、「人」のために生きることができたのだとわかりました。

私の毎日は、たくさんの人とのつながりの中にあります。いつもたくさんさんの愛をもらっているのです。今度は私が、たくさんさんの愛を、大切な思いを、多くの人に届けていきたいと思っています。

佳作

届けよう折り鶴と愛

長崎県長崎市立山里小学校六年

金子 蒼 慎
かね こ そう ま

僕の誕生日は八月六日だ。それは広島に原爆が落とされた日である。僕は小学二年生まで広島市の爆心地に近いところに住んでいた。僕の通っていた幼稚園には、原爆の被害にあった子供の慰霊碑があったことを少し覚えていて、僕は毎朝その前で意味もよく分からず手を合わせていた。小学校では原爆の恐ろしさについて学び、毎年八月六日に向けて折り鶴を折っていた。広島には被爆者の象徴として佐々木禎子さんという少女がいた。禎子さんは被爆によって白血病になり、病床で自身の回復を祈りながら千羽を越える千羽鶴を折ったといわれている。それから、もう二度とこのような悲しいことが起きないようにと、願いを込めて千羽鶴が折られるようになった。小学校低学年だった僕でも、禎子さんの悲しい話はずっと心に焼き付いている。

その後長崎に転校し、さらに平和学習を深めることになり、原爆の恐ろしさや平和の大切さについて日々学んでいる。長崎の被爆者の象徴である永井隆博士は、自身が白血病で苦しみながらも周りの人々を救い、その恐ろしさを本に残している。僕の通う山里小学校には、永井博士ゆかりのものが多くあり、永井博士の想いは僕たちの心に刻まれている。このように広島と長崎で原爆と平和について学んだことは、大変貴

重な経験だと思う。

昨年は広島でG7サミットがあった。そして、世界各国の首脳が初めて原爆資料館を訪れたが、本当に原爆の恐ろしさを理解していただいたのだろうか。僕はそうとは思えないと思う。アメリカでは、「戦争に勝つために原爆を投下したことは正しい。原爆がなければもっと多くの人が死んだ。」と、教えられていると聞く。僕はそのことが信じられなく、悲しい気持ちになった。僕たちは核兵器を二度と使ってはいけないと声を上げているのに、核兵器を持つことが正しいという国が一つでもあれば、核兵器は減らず、またこのような悲劇が起きてしまうかもしれない。

しかし、原爆の恐ろしさについて学ぼうという気持ちがある人は世界中にいる。長崎や広島で多くの外国人を目にするからだ。このような人たちが、禎子さんや永井博士のような人について知ろうとしたり、心を込めて折り鶴を折ったりする人が世界中で増えたら、核兵器を使おうと考える人は減ると思う。

次に日本でサミットを開催するときは長崎を希望する。そして、原爆の恐ろしさや永井博士、禎子さんについて深く知ってほしい。オバマ大統領が来日し、広島で折り鶴を折った。各国の首脳にも平和を願って折り鶴を折ってもらいたい。原爆の恐ろしさが一人ひとりの心に残ると、核兵器を使うことは正しいと学んでいる核保有国も簡単に核兵器を使うことはできないはずだ。僕は学んできた永井博士の想いを多くの人に伝え、世界の人々と平和の大切さを共有していきたい。

佳作

お祈りならどこへでも

東京都星美学園小学校五年

吉谷奏音
よし たに か のん

私は、永井隆さんの伝記を読み、努力を忘れないで一生を周りの人や神様に捧げ続けたことがとても素敵だと思いました。永井さんは、長崎で被爆し、白血病を背負いながら生きていくことになりました。自分も辛いにも拘わらず、沢山の人々を助けます。

永井さんが如己堂で残した、多くの名言の中で、「体は動かなくても腕と指はまだ動く。書くことができるし、書くことしかできない。」という言葉が好きです。なぜなら、自分が苦しんでいる立場なのに、周りの人のために自分のできる最大限のことをしたからです。もし私が永井さんの立場だったら、周りの人のことを考えられずベッドで横になっているだけでしょう。さらに、永井さんはその努力で得た対価を寄付し困っている人を助けました。では、私には何が出来たのでしょうか。お祈りならできます。

私の学校では、五月に聖母祭というマリア様に感謝の心を伝える日があります。それに向けて、徳の花という小さな良い行いを積み重ねて、心の中にきれいなお花を咲かせていきます。その期間中に担任の先生が、「同じ空の下で今苦しんでいる方が沢山いらっしゃるのだよ。」とおっしゃっていました。今、私がこうやって、文章を書いている間もおなかを

空かせていたり、大切な命が奪われたり、一人で生きていかなければならない小さな子供がいたり様々な理由で苦しんでいる方々が沢山います。その方々のことを考えると涙が出てきました。直接助けることはできないけれど、その方々の気持ちを想像し、お祈りすることによって心を少しでも寄せられるのではないかと思いました。そこで今年の徳の花では、心を寄せてお祈りすることにしました。お祈りであればどこへでも行けます。朝、クラスみんなと心を合わせてお祈りを三十回行いました。心を寄せてお祈りすることの大切さを学んだので今年の聖母祭は例年よりも準備が出来て迎えることができました。暑い中での聖母行列は大変でしたが、マリア様に気持ちを伝えられたと思います。来年の聖母祭は白夜の天使、花まき少女になり、学校全体をリードします。その服を着るためには、心をきれいにしなくてはなりません。自分から進んで動く、自分のことを棚に上げない、うそをつかない、を実行し、さらに心を込めてお祈りしようと思います。

小さなことに忠実なものは、大きなことにも忠実です。というみことばがあります。小さな目標を立ててこつこつ積み重ねていくことが、大きなことを成しとげることにつながるという意味です。永井さんが病気を背負いながらも、人のために力を尽くせたのは、小さな積み重ねと、心を込めたお祈りを続けたからではないかと思います。少しでも多くの方が心を寄せることの大切さに気づければ、平和に一歩近づくのではないのでしょうか。

最優秀賞

敵も味方もない平和への道標

鳥取県米子市立後藤ヶ丘中学校二年

藤井 響平

日本の敗戦から二年後の一九四七年、昭和を代表する将棋の名棋士升田幸三九段は、連合国軍総司令部（GHQ）に呼び出された。GHQは将棋の禁止を検討していたという。「チェスと違って、日本の将棋はとった相手の駒を自分の兵隊として使用する。これは捕虜の虐待であり、人道に反するものではないか」と問われた升田九段は、次のように論破した。

「冗談をいわれては困る。チェスで取った駒をつかわんのこそ、捕虜の虐殺である。……日本の将棋は、捕虜を虐待も虐殺もしない。つねに全部の駒が生きておる。これは能力を尊重し、それぞれに働き場所を与えようという思想である。」（升田幸三『名人に香車を引いた男』より）

結局、将棋は禁止されずにすんだ。もし禁止されていたら、僕は大好きな将棋をしていないし、現在の将棋ブームもなかったはずだ。将棋という日本の伝統文化も失われていただろう。僕は升田九段の自伝を読み、その考え方と行動に感動し、今まで以上に尊敬するようになった。同時に戦争で生まれる「捕虜」に関心を持つきっかけとなった。

升田九段は、若いころ二回の軍隊生活を強いられた。特に二度目は、太平洋戦争の激戦地ミクロネシアのポナペ島に送られ、何度も死を覚悟したという。幸い生還することができたが、広島県の実家に帰る途中、原爆で廃墟となった広島市を見てショックを受けた。

最近、ロシアのウクライナ侵攻や、ハマスとイスラエルの紛争などで、捕虜の扱いが問題視されている。捕虜の保護や交換が行われたというニュースもあれば、捕虜が殺害や拷問をされたというニュー

スもあり心が痛む。国際人道法では、捕虜は人道的な待遇を受け、暴行や脅迫、侮辱などから保護されなければならないことが定められている。しかし、現在起きている各地の紛争では守られていないことが多いように感じる。

今年是一九〇四年に始まった日露戦争から一二〇年である。日露戦争では、日本の海軍が日本海でロシアのバルチック艦隊を破ったことが知られている。山陰の海岸にもロシアの軍艦やロシア人乗組員の遺体が流れ着いた。地元の人々が救助したり、亡くなった人を丁寧に埋葬したりした。当時日本には八万人近いロシア人捕虜がいた。日本には各地にロシア人捕虜の収容所を設けて、生活面の自由を保証し、温かく対応したという。敵軍の捕虜を味方のように大切にしたのである。僕は、相手から取った将棋の駒を尊重する升田九段の思想に似ていると思った。

これは永井隆博士の生き方にも共通する。永井博士も二度戦争に行った。日中戦争で軍医をしたときは、敵も味方も関係なく一生懸命治療した。傷だらけの兵士を治療するとき、永井博士の胸には戦争に対する怒りがこみ上げてきたという。永井博士の著書『いと子よ』には、次の言葉がある。

「敵も愛しなさい。愛し愛しぬいて、こちらを憎むすぎがないほど愛しなさい。……敵がなければ戦争も起こらないのだよ。」

永井博士の経験から生まれた言葉だ。「如己愛人」の心を持つことが平和への第一歩だということを、永井博士は示してくれた。

今この時にも、捕虜としてつらく苦しい思いをしている人がいる。少しでも早く元の生活に戻ってほしい。かつて日本も他国の捕虜にひどい扱いをしたことがある。よいことばかりではないことも知っておかなくてはならない。そのためには、しっかりと歴史を勉強する必要がある。そして、戦争の悲劇には、敵も味方もないことを忘れてはいけない。

先人たちは、今を生きる僕たちに平和な世界をつくるための道標を与えてくれた。その道標を頼りに、ゆるぎない平和に向け、自分なりに貢献できることを考えていきたい。

優秀賞

平和へのバトン

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校九年

片岡睦深

「まぶしい」

糸数壕から出た時、思わず口からこぼれた。この輝かしい光は、希望の光だと思った。

今年の春、私は修学旅行で沖縄を訪れた。そして平和学習の一環として、沖縄平和祈念資料館やひめゆりの塔を見学した。糸数壕もそのうちのひとつだった。

壕に入る時、私は前日に聞いた新垣由紀さんの講話を思い返した。新垣さんは白梅学徒隊だった中山きくさんの戦争体験を受け継ぎ、語り部として記憶の継承を続けている方だ。新垣さんから聞いた戦時中の壕の様子を思い浮かべる。怪我人であふれ、怒号や悲鳴、うめき声が各所から上がる、不衛生な環境で何百もの人々が生活していたこと。私と歳の変わらない、将来に夢や希望を抱いていたごく普通の少女たちが、突然看護要員として働かなくてはならなかったこと。頭に浮かんだ光景と目の前にある糸数壕とを重ねると、彼らの思いが肌で感じられるようだった。同時に、以前母に言われた言葉思い出した。

コロナが五類に移行し修学旅行に行けると決まった時、私は舞い上がるような気持ちだった。インターネットで沖縄の観光地や美しい海を調べては胸を弾ませる、そんな私に母は言った。「楽しさ以外の感情もたくさん感じ取らないとだめだよ」と。その時はワクワクした気持ちに水を差されたようで腹が立ったが、糸数壕を訪れ、母はこのことを言っていたのだと気が付いた。被害者たちのこの苦しみは、怒りは、悲しみは、決して風化させてはいけない。後世へ語り継がなければならない。そう強く感じた。怖くて目を逸らしたくなかったが、暗い壕の中で必死に向き合った。私は「平和へのバトン」

を受け取ったのだ。

しかし思えば、「バトン」を受け取ったのはこれが初めてではない。中学二年の時に家族で訪れた広島原爆ドームや原爆資料館もその一つだ。そこには戦後八十年近く経った今でも、当時の爪痕が色濃く残されていた。焦げ残った遺留品の数々や被爆者の証言ビデオを見ると胸が締め付けられた。資料館を出た時は久しぶりに息が吸えた心地がした。

それから数日後、歴史の教科書にも載っている加納莞薔に関する記事が新聞に掲載されていた。母に頼んで安来の加納美術館に連れて行ってもらった。島根にも平和を求めて活動していた人物がいたことに胸が熱くなった。

「赦し難きを赦す」これは莞薔が戦犯の赦免を求めて当時のフィリピンの大統領であるキリノ氏に送った言葉だ。この言葉を受けて大統領は、捕らえていた日本兵全員を釈放し母国へと帰した。大統領は日本兵に家族を殺されている。しかし彼は平和のために「赦す」ことを受け入れ、争いの連鎖を止める決断を下したのだ。

糸数壕、広島原爆ドームや原爆資料館。そして加納美術館、莞薔の言葉。これらがなぜ残されているのか、何を伝えたいのかを考えた時、母の言葉の真意を知った。母は戦争の現実を知り、被害者たちの思いと向き合い、平和に繋がる行動を模索しなさいと言っていたのだ。

多くの大人たちが次の世代に平和へのバトンを託そうとしている。そのことに気付いた今、私は世の中をこれまでとは違った視点で見ることができるようになった。世界ではロシアとウクライナの戦争が続く、ガザ地区ではイスラエル軍による大きな被害が出ている。ただ、それは遠くの地で起きている私たちと無関係のできごとではない。私にもできることはたくさんあるはずだ。

壕を出た時の太陽の輝き、ぬくもり、胸の奥からこみあげる安心感。今でも鮮明に思い出せるあの光。そんな希望の光が世界中で満たされるように、平和を求めて行動していきたいと思う。受け取ったバトンは、今も私の手の中にある。

佳作

14歳の私に出来ること

東京都玉川聖学院中等部三年

寺西一葉梨

私の父方の祖父はいま87歳です。戦争時は小学校低学年だったそうです。大阪の八尾飛行場の近くに住んでいたので、昼夜関係なくB29が飛んできて爆撃されました。小学1年だった頃、集団下校時、小さな祖父は一番先頭を歩いて帰宅していました。B29は背後から撃つてきました。後ろを歩いて上級生たちは撃たれて死に、祖父は一目散に走り、田畑のあぜにある溝に入り、ドロドロになりながら難を逃れたそうです。

きっと狙撃してきたアメリカ兵は、民間人であり、子供の集団だと気付いていたはずです。日本人を殺す事を優先に、子供たちを虐殺する事に何の抵抗もなかったのでしょうか。

学校では軍国主義一色で、子供たちにビンタをするのが当たり前になっていたそうです。今の時代なら、「子供を殴る事は正統ではない！」と大声で言えるのに。自分の思ったことも口に出ることが出来ない、言論の自由を奪うことや、子供を虐待する狂った状況が戦争なのだと、つくづく思われます。

祖父の話によると、戦時中、畑のものを盗り捕まった男の人がいたそうです。畑の主は、畑の真ん中にある櫓（野菜泥棒が多いので、見張り台としてあつたそうです）に、見せしめに男を縛り付けました。夏の暑い中、水も与えられず、通る人に指をさされ、子供たちもその男をののしりました。その男は「朝鮮、朝鮮、ばか（馬鹿）にするな！」と言ったそうです。日本人でも食べるものが無くて苦しい時代、日本に連れてこられた朝鮮人たちは、もっと苦しい生活をしていて、盗むしかなかったでしょう。また、差別もあり、日本人は彼らに対して特に厳しかったそうです。彼らも戦争の被害者とし

か考えられません。

そして、“飢えた大人は本当に恐ろしい”という強烈な記憶だけが強くあるそうです。戦争で飢えることにより、人間は正常な判断が出来なくなるのだと、祖父の話で思いました。とても恐ろしい事です。

母方の祖父は今86歳です。祖父に子供の頃どんな子供であったか聞いてみたことがありましたが、黙ってしまい答えてはくれませんでした。母に聞くと、祖父は大阪市西区に小学校1年まで住んでおり、大阪大空襲の時に焼夷弾が家に落ち、家を焼かれてしまったそうです。祖父はその時、小学校に行っており、家族と再会するまで恐ろしい思いをしたのだと思います。幸いにも、ちりぢりばらばらだった両親と兄弟たちは全て死ぬことはなく、また再会できたそうです。後に祖父の長兄と次兄が栄養失調で餓死したそうです。家も焼かれたので、他人の家に家族で居候してお世話になっていたようですが、良い思い出ではないのでしょう。普通なら楽しい子供時代の思い出が、「思い出したくない事」であるのが悲しいです。祖父もまた、今でも消えない傷を抱えているのだと、すごく悲しくなりました。戦争は、生き残った人たちの心にも暗い影を落とします。祖父たちのように、一生終わる事のない戦争に苦しみ続けるのです。

私はいま14歳です。この私が出来ることを考えてみました。非力な私ですが、祖父たちが体験した事を語り継ぎ、反戦を考えることを止めてはいけないということです。これからも、たくさん戦争の事を扱った本を読み、正確な情報をニュースやネットで知り、今の世界の状況を知らなければならぬと思います。そして、身近な家族や友人とそのことを話し合い、政治にも目を向け、投票権を持つことが出来る18歳までに、どのような政治を行っている人に投票すれば、戦争を無くすこと、もしくは遠ざけることが出来るのかを知らなければなりません。そのために勉強を怠らずにしていかなければならないと思います。ひたすら平和を愛し、戦争で悲しい思いをする人がいなくなることを願って声を上げる。それが14歳の私に出来ることだと思いました。

佳作

「愛」を胸に新たな一步を踏み出す

広島県盈進学園盈進中学高等学校三年

四辻佳穂

私は本当の戦争を知らなかった。私よりも小さな子どもが戦争を知ってしまった、同時に命を奪われている現実を毎日、胸が痛む。

いま（2024年7月下旬）、ロシアによるウクライナ侵攻は2年5ヶ月が、イスラム組織ハマスとイスラエルの軍事衝突は約9ヶ月が経過した。この間、ウクライナの民間人犠牲者は1万人を大きく上回り、ガザ地区での犠牲者は約4万人に達する勢いだと言われている。この事実は、戦争の無い地で平和を呼びかけてきた私に大きな無力感を与えた。

ウクライナの詩人オスタップ・スリヴィンスキーさんが住民や避難民から、戦時下の日常を聞き取ってまとめた「戦争語彙集」を読んだ。正直に言えば、私の生活とあまりにかけ離れている戦争という現実を、私はすぐには理解できなかった。でも、キーウに暮らすマリナさんの証言が、私の頭から離れることはなかった。タイトルは「恋愛」。

「レストランでのデート……夢見ていたとおりの時間。だが、ほどなく砲撃が始まる。レストランは閉まり、やがてすべてが営業停止。彼は、ミサイル部隊に入っているから、今度は前線に配属される。わたしたちはさよならを言わなければなりませんでした。」私は私の愛を誰からも壊されたくないと思う。

私は、平和活動で、「核兵器廃絶を目指すヒロシマの会」顧問の森瀧春子さんに会った。彼女はがんと闘いながらも、私と仲間たちに核廃絶への強い思いを伝えて下さった。私たちはその内容を記録して記憶し、継承するために、彼女の証言集の作成を急いでいる。その後はそれを英訳し、世界に発信する予定だ。春子さんの言葉が

重い。「ガザでは学校や病院も全て破壊されている。人間が人間にすることではないと思います。イスラエルは核兵器使用の可能性にも言及しています。一回でも核を使ってしまうと、核戦争になるのは目に見えています。なんとしてもそれは阻止しなければなりません。」

コロナによる制限がなくなった今年の春から、私たちは、春子さんの思いを胸に、地元・福山の街頭や、原爆ドーム前に立ち、仲間と核廃絶の署名を集めている。「活動を続けてね」「知り合いも連れて来るね」と励ましてくれる人々がいる一方で、「具体的にどうやって核を廃絶するわけ?」「なんで核があっちゃいけないの」と署名活動に批判的な声も聞いてきた。その声に私は黙ったままで、体が固まってしまったという経験もした。

そんな時、先輩たちから大切なことを教えてもらった。春子さんの父は被爆者で、広島市の核廃絶活動をリードしてきた森瀧市郎さん。彼は、「力の文明から愛の文明に」を信念に、世界の核実験に抗議し、広島市の原爆死没者慰霊碑の前で生涯で約五百回の座り込みを続けた人である。座り込みの前を通りすがった子どもの「座り込みでも核はなくならない」という声に苦悩した市郎さんは『精神的原子の連鎖反応が、物質的原子の連鎖反応に勝たねばならん』と答えを出した。つまり、『核を無くそうとする仲間は増える』という意味だと私には思える。

このような広島市の先人たちの行動や信念を学んで、私は思った。署名で直接、戦争や紛争、それによる苦しみや悲しみを全て無くすることはできないだろう。でも、署名をしてくれた人、見てくれた人たちが改めて核の存在や平和と戦争について考え、今起こっているウクライナ侵攻やガザでの現状について思いをはせてくれたら、私たちの行動の意味は、小さいかもしれないが「ある」と感じる。

森瀧市郎さんと永井隆先生の共通項は「愛」。キーウの若者の愛が壊されている現実と永井隆先生の「如己愛人」の教えを胸に、そんな現実を少しでも無くすために、私は今夏、市郎さんが座り込みを続けたあの場所で、平和な世界をつくるために新たな一步を踏み出す。

最優秀賞

飛行機に乗って戦争のことを考えた

北海道北嶺高等学校一年

平野 宏太郎
ひらの ひろたろう

私は学校の寮から実家へ帰省するときにいつも飛行機を使う。だから普通の高校生よりかは飛行機に乗る回数が多いかもしれない。飛行機が長い滑走路から離陸してあつという間に高度を上げて真っ白な雲の上に到達するのはとても格好いいし気持ちがいい。

ある日、実家に帰った私は寝転んでスマホゲームをしていた。何となく付けていたテレビで戦争に関する番組をしていたのを何気なく横目で見ていた時、戦闘機に乗る兵士の姿が映った。ゼロ戦という有名な戦闘機に乗る若い男性パイロットだ。盃のお酒を飲んでその人は敬礼した。花を持った若い女性たちに見送られてゼロ戦はぐんぐんと上昇し見えなくなった。それは歴史の授業で習った神風特攻隊の映像だった。敵の船に近づいても大砲や機関銃が下から打ちあがってくる。翼が砕けたゼロ戦は日の丸を反転させながら海に墜落していった。私は初めて見る映像にショックを受けた。テレビの解説で十代の若者たちが特攻に参加していたときいた。しかし、その時の私はそれ以上の考えを広げることが出来ず、またスマホゲームに戻ってしまった。

休みが終わり寮に戻るために帰りの飛行機に乗った時のことだ。私は窓側の席に座った。飛行機の外で整備員の方々が整列して手を振っていた。これまで何度かみたことのある光景だ。けれどもその時は少し違い、私にはテレビで見た女性たちが手を振っているように見えたのだ。離陸して私は自分がゼロ戦に乗ったパイロットになった気がした。これから敵の軍艦に突っ込まなければいけない。私はものすごく怖くなってきた。母親の顔が一番に浮かんできた。そし

て父親、その次が弟の順番だった。ポンと音がしてベルト着用サインが消えた。周りの人のなかにはトイレに立つ人もあった。私は少し落ち着いてきたがのどが乾いたのでジュースを注文した。その後、私はしばらくしてうとうとと眠り始めた。

一時間後、機体がガクンとうなつて少し揺れ始めた。ポンと音がして着席するようにアナウンスがあった。少しずつ高度が下がっていくことがわかった。私はまた戦闘機のパイロットの気分になってきた。高度を下げるということはこれから敵艦めがけていくということだ。安全ベルトがまたお腹に食い込んで、のどがカラカラになってきた。私は窓の外を見回して敵の船がいるかどうか確かめた。まだ雲の上だったから海の様子はわからなかった。できることならば敵の船と会いたくないと思った。もしかしたらあの若いパイロットも同じことを考えたかもしれない。すると、また母親の顔が浮かんできた。なんできちんと母親にお別れの挨拶をしなかったのだろう。私は後悔の気持ちでいっぱいになってきた。「お母さんまた会いたいよ。死にたくないよ」私は必死で何かに抵抗していた。「まもなく当機は着陸態勢に入ります」とアナウンスがあった。ゴーつとすごい音がした。雨が窓を叩く音がした。私はそれが敵の船から打ちあがる機関銃の音に聞こえてきた。「お母さん。お母さん。助けて」私は目をつむった。ドスンと衝撃がして飛行機が着陸した。ガーつとブレーキがかかって飛行機が止まった。「お母さん、無事に着いたよ。助かったよ」私は早く母親に無事のメールがしたかった。

いま日本は平和である。世界では戦争も起こっているが直接の被害はない。そして日本の若者が戦争には行っていない。でもテレビの中のあの若者はきつと戦争で死んだらう。死ぬのは本当に怖かっただろうし家族のことを考えたらう。好きな人もいたかもしれない。私はそんなことを考えながら飛行機のタラップを降りた。私はこれからも飛行機に乗るたびに同じことを考えるかもしれない。でもそれは、これから世界中の若者が戦争に行かないためにはとても大切なことではないかと思った。

優秀賞

祖母の言葉

神奈川県セントメリーズインターナショナルスクール十年

陸くが

颯大郎そうたろう

今年の春、祖母が亡くなった。僕の人生に影響を与えてくれた愛に溢れた人だった。

僕はミッション系のインターナショナルスクールに通っている。この学校に通いたいと言った時、「学校で世界を学べる。良い決断だ」と僕の背中をおしてくれたのも祖母だった。祖母は僕が幼い時から『世界をつなげる人になつてほしい。』と世界につながるスポーツ、音楽、美術等、多くのイベントに僕を連れて行ってくれた。その中で僕の学校に出会ったのだ。母国語も文化も宗教も考え方も違う多様性が集まった世界の中で僕は学校生活を送っている。僕が小学生の時、韓国人の友人と政治の話になり意見がぶつかった。その時に友人のお母さんが僕達に「政治と友情は別。お互いの考え方を理解してもっと仲良くなればいい。」と話してくれた。僕は「大人になったら2つの国で面白いことをやろう」と笑いあった。こんな風に、時には文化や考え方の違いから意見がぶつかることもあるが理解しながら友情や信頼を育んでいる。まさに世界を学んでいるのだと思う。

2年前、祖母が末期癌と宣告された。癌と診断されてから祖母は今まで聞いたことのなかった話を沢山してくれるようになった。幼い頃の話、学生時代の話、家族の話、趣味の話、これからの話、そして戦争の話。

抗がん剤で起き上がるのが辛くても祖母は僕が出かける時は必ず玄関に来て「いってらっしゃい」と送り出してくれた。僕が「送らなくていいよ」と不機嫌に言ってしまった時があった。「戦争の時と同じ。私が後悔しないために送っているの」と僕を抱きしめた。その時の僕には祖母の言葉が理解できなかった。

ウクライナで戦う人が足りないという戦争のニュースを見ていた時、突然、祖母が「ずっと言えなかった後悔がある」と戦後の話を始めた。

祖母の父は肺に持病があつて戦争に召集されなかった。戦後、戦争から戻ってきた家には食料やお菓子が届き、家に無事に帰ってこれたという喜びも溢れていたのだろう、戦後なのに明るく光って見えたそうだ。そして、祖母は父親に「なんで戦争に行かなかったの？行けばよかったのに」と言ってしまったというのだ。まだ幼かった祖母の無邪気さから出た言葉だったのだろう。祖母の父は何も言わずにじつと下を向いていたそうだ。祖母は、この日のことを、ずっと誰にも言えずに苦しんでいた。「言葉というのは本当に恐ろしい。だから後悔しない言葉を伝えるようにしているの」と祖母は泣いた。戦争の恐ろしく悲しい体験の話は沢山聞いた。でも、この時の話ほど僕の胸にぐさりと刺さった話はなかった。戦争は恐ろしいと言いながら、その戦争に行つてほしかったと命を切り裂くような言葉を言ってしまったのだ。祖母の「いってらっしゃい」の言葉の意味を僕はこの時に理解した。

亡くなる数日前、「颯大郎も病院にくるからね」と言つた母に祖母が伝えた言葉がある。これが最後の言葉になった。声が出なくなつた祖母が宙に指で書いた言葉は『おしつけないでね』だった。思いを『おしつけること』は心にマイナスの感情を生む、と祖母はよく言っていた。「僕が会いたいから来るんだよ」母が伝える前に自分で伝えればよかった。

言葉は怖い。後悔を生み、人を傷つける武器にもなる。でも心からの言葉は絆を作り友情を広げ、未来を作り、平和を作り出すことができる。自分の考えや思いを『おしつける』ことと『伝えて理解しあう』ことの違いこそ、戦争と平和の違いなのではないかと思つた。これから僕はきっと沢山の人に出会い、多くの言葉をかわすだろう。『おしつける』ことのない心からの言葉を伝えていきたいと思う。それが今、僕にできる平和な世界への第一歩なのだ。15年間、祖母が僕に伝え続けてくれた数々の言葉が僕にそれを教えてくれた。

佳作

この命を懸命に生きて

沖縄県KBC高等学院三年

仲宗根 早紀

昭和十九年八月二十二日、沖縄に危険が迫ってきたので、多くの学童たちを九州へ疎開させることになった。疎開船の名は「対馬丸」。学童、引率教師、一般疎開者と船員、兵隊員計一七八八人が乗船していた。九州への途中、鹿児島県の悪石島海上でアメリカの潜水艦の攻撃を受け、乗船者の約八割の人々が真つ黒な海底へ沈んで行った。親元を離れる不安はあつたが、夢と希望を持って乗船した子供達。私の祖父母も沖縄戦の体験者。疎開対象児童の一人で、乗船の準備をしていた。しかし、祖父母より小さい子や他の民間人の追加により別の船への乗船となった。そのまま対馬丸に乗船していたら返らぬ人になっていたのかもしれない。祖母は慰霊の日が近づくと「私の変わりに乗船した人は生きているだろうか。」と目に涙をうかべ話をする。今の私が居るのは祖父母が生き抜いてくれたからこそである。沖縄は唯一地上戦が行われた場所。四人に一人が亡くなった。私の住む西原町は沖縄の中でも激戦地で、約半分の人が亡くなった。今は学園都市として知られている、静かな町である。町民は当時から「ユイマール」の精神で助け合い、互いを大事にしあう、平和な村だった。七十九年前、村民約一万人の生存者がいたものの、沖縄戦で約四十七%の人々が亡くなった。一家全滅の家族や、一人だけ生存している家族も少なくない聞いた。なんて凄まじい出来事だったのだろうか。

小学生の頃、学校帰りに石を積み重ねた石垣に、穴があいているのがあり、指を入れて数えたが多すぎて途中でやめた。何の穴か父に聞いてみると、戦時中の弾痕跡だと言った。人々はこの小さな村を、

どんな想いで逃げたのだろうか。想像を絶する光景だ。

この町には戦没者を祀る「西原の塔」がある。生存者が協力して、住民や兵士の遺骨を収集し、納骨をして弔ってきた。この塔が建立した十月には、毎年、町民や関係者が来て戦没者追悼式が行われている。戦争体験者たちが、当時の悲惨な出来事を話しているのを聞いた。あちこちから飛んでくる銃弾を受け亡くなる者、空襲を受け手足が吹っ飛んだ友人がいたこと、七十九年経っても忘れない記憶。彼ら、彼女らはどのような思いで戦禍を生き抜いてきたのだろうか。沖縄戦証言者の話しを見聞きすると、「軍隊は住民を守らなかった」という声も聞こえてくる。

今、沖縄は数年前とは様相が変わってきている。宮古島や石垣島、与那国島には、次々と自衛隊基地が建設されている。政府は、台湾と中国との間で衝突が起きた際に備えるという。いわゆる「台湾有事」だ。防波堤として南の島々の色鮮やかな風景とは対極に、軍事要塞化されていく物々しい雰囲気も滞っている。それは「まるでいつかみた戦前のような」という声も聞こえてくる。

「台湾有事が起きたらどうなるのか」と不安を訴えると、防衛庁は「九州に疎開させる。」と言っている。「島の何万人の人々を短期に船と飛行機で九州に疎開させられるのか。」と疑問と不安で落ち着かない日々を送っている。この話を聞いた時、私は「対馬丸」の事を思い出し、戦前の沖縄と同じ状況だと思った。戦を避けるために、話し合いをする事が、必要なのだ。

今こうして平和な沖縄があるのは、あの戦争を懸命に生き抜いた人々がいたからこそである。世界へ目を向ければ、あちらこちらで紛争が起きている。私は戦争を知らない。でもこの命は祖父母が生きて繋いでくれたから。今生きているこの社会は、多くの失われた人々の尊い命と想いの上で築かれている。だからこそ私たちは、常に考え、守り続けなければいけない。戦争は最も無駄にしている時間とも言えるだろう。だからこそ二度と戦争はしない。

大事な子孫のためにこの命を懸命に生きて。

佳作

「生きていてよかった」と思える日

広島県盈進学園盈進高等学校二年

松^{まつ}葉^は悠^{はる}乃^の

「どうして自分だけが生き残ってしまったのか。」多くの被爆者がこの言葉を口にする。生き残ることができたのに、「死んだ人に申し訳ない」と、命があることに罪悪感を抱く。あるいは時に、放射能の後遺症や生活苦などから「死にたい」とまで思ってしまう。それが原爆の本当の恐ろしさなのだと私は感じる。

だが、だからこそ、多くの被爆者たちは、この葛藤を経て、「あの日」を語る理由をこう表現するのだと私は思う。「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない。」と。この敵対や復讐を超えた素朴だが崇高な平和への願いと魂を引き継ぐことが、「被爆者の生の声を聞ける最後の世代」である私の役割だと、私は自分に言い聞かせて行動している。

私は、中学1年生から、国連に提出する核廃絶の署名活動に取り組んでいる。2008年から引き継がれてきたこの活動は、コロナ禍の4年間、街頭に立つことができなかった。でもその間、細々としたが、校内で呼びかけ、その火を消さないようにつないできた。そして私は昨夏、ウィーンの国連で行われた核不拡散条約準備委員会に際して開かれたフォーラムで上記、被爆者の葛藤と、平和への願いと魂を英語で伝える機会にも恵まれた。

そして高校2年生になった今、福山駅前や原爆ドーム付近で、仲間たちと、市民の中に入って、私も一市民として、署名活動ができる日々を大切にしたいと思っている。

国連でのスピーチでも、街頭署名活動でも、始める前に必ず、私は目をつぶってある光景を思い浮かべる。この署名活動の初年度からずっと語り継がれてきた、先輩たちが活動中に体験したある被爆

者との交流だ。

広島市中心部でのこと。おばあさんが自転車から降りて署名に応じてくれた。だが、おばあさんの手はすぐに止まった。おばあさんは、署名用紙を涙でぬらして泣いている。先輩が「大丈夫ですか」とおばあさんの肩に手をやると嗚咽が激しくなった。しばらくして、おばあさんが途切れ途切れに語り出した。

…ピカが憎い。ピカは絶対にあつたらいかん。私の家族はみんな、ピカでやられた。私はひとりぼっちになって施設に預けられた。ひもじかった。苦しかった。寂しかった。辛かった。そんな日々の中、何度も「死にたい」と思った。そうして今日まで生きてきた。実は、昨日もここを自転車を通った。みなさんの呼びかけに署名をしようと思った。でも、そうしたら、「あの日」とそれからの辛かった日々を思い出して胸が苦しくなりそうだったから、心の中であなたたちに「ごめんね」と言って、通り去った。家に帰って、テレビをつけた。すると、この署名活動のことをニュースでやっていた。「中高生たちは明日も街頭に立つ予定です」とアナウンサーが言った。「暑いのに、あの子たちは明日も…」と思うと、通り去ったことを申し訳なく思ってたね。だから今日、やってきたんです。でもやっぱり思い出したのよ。辛かった日々を。戦争は絶対にやったらいかんよ。核兵器は一発もこの世にあつたらいかんのよ。私と同じ思いをあなたたちにはさせられないと思うんよ。活動してくれてありがとう。うれしいよ……。そして最後に、おばあさんは先輩たちにこう言った。「ああ、生きていてよかった」と。何度聞いても、何度思い出しても泣けてくる。同時に、ぐっと勇気がわいてくる。

永井隆先生も子どもたちを残して世を去った。無念だったと思う。子どもたちも苦労したに違いない。おばあさんの人生と重なる。だが、その苦労や悲しみに耐えて、被爆者やその家族たちが生き延び、語ってくれたから、私たちの現在の平和があるのだと私は思う。

私はその苦労と尊い命に応えたい。すべての被爆者、いや、すべての人が「生きていてよかった」と思える日を実現するために、私はこれからも街頭に立つと決心している。

最優秀賞

おいたんのこと

岡山県

前^{まえ}田^だ有^ゆ美^み

私が二十代の頃勤めていた職場に、脳卒中の後遺症を持たれた三十代の男性が入社してきた。もつとも、障碍者といっても暗いイメージは微塵もなく、いつもお洒落な服装をし、顔には笑みをたたえていた印象しかない。私達は親しみを込めて、「おいたん」と、彼のことを呼んでいた。

脳卒中になったのは三十二歳の時だと彼は教えてくれた。このままでは身体は拘縮し、寝たきりの生活になるでしょうと言う医師の言葉を、不屈の努力で覆し、ゆつくりではあるが、左足をひきずりながら歩くことができるようになり、障碍者枠で就職も叶ったとのことだった。

私達は同じ部署で毎日顔をつきあわせて仕事をしていた。私達のは、福祉の相談コーナーだった。私は福祉の大学を出て、社会人経験は浅かったが、彼はまたしては私を「姉ちゃん、お前はすごいな。その若さで。」と褒めてくれていた。しかし、私からすれば、福祉の知識を持たずとも、人の心にずっと入っていくことができる彼、どんなに泣きわめきながらやってきた人でも、彼と話をすることで笑顔を取り戻すことができる彼の天性の才能を尊敬していた。

そんな彼が、人事異動で図書館に移ることになった。階が違うので、なかなか以前のように顔をあわせ、親しいやりとりができずにいた

が、久しぶりにお弁当の席で二人きりになった時、彼は少し寂しうに言いだした。

「姉ちゃん、笑ってくれ。オレ、この歳でいじめられてんだぞ。」

「え？」

「図書館ではな、皆と同じように効率よく仕事ができねえといけないんだ。速く速く、どうして私達と同じようにしてくれないんですか？って毎日言われてさあ。でも、そんなに言われてもオレの身体は動かねえんだ。そんなオレをあいつら笑いやがるんだ。」

私は怒り心頭になった。

「私、絶対にそいつらを許さない。」

そういった私を彼は真剣なまなざしで見つめ、そして時間をおいてこう言った。

「姉ちゃん、許してやれ。オレも許すってことに決めた。いや、許すじゃなくて、感謝しなければならなくて、今わかった。」

彼は強い口調で言った。

「あいつらのお陰で、今までオレがどんなに恵まれた人間関係の中で働いてこられたかが今わかった。あいつらにも感謝している。もちろん、姉ちゃんにもな。本当はありがたかったんだ。」

私の中から涙の粒がぼろぼろと零れ落ちた。なんて大きい人なんだろう。なんて心豊かな人なんだろう、私はどんなに頑張っても彼に追いつけない理由がわかったような気がした。

生きていると、理不尽な目にあったり、その合わない人と出会うことが多々ある。そんなときに、人は、「許せない」と思うであろう。しかし、一歩踏み込んで、それが「感謝している」に変わると、目の前にある環境はがらりと変わることができる。それは、とても

温かくて、人を大きくさせるものなのだ。

彼は、その言葉を私に残し、ほどなく二度目の脳卒中をし、静かにこの世を去った。だから、「姉ちゃん、オレはどんなときでもお前さんの味方だぞ。」そう言ってくれる人は、いなくなってしまったが、彼に教えられたこと、とりわけ「感謝」して生きろというメッセージは私の中で今も生きている。

彼が逝ってはや二十五年。彼は私の心の中で生きつづけている。

優秀賞

秘密を抱えた父の教え

山形県

古瀬節子

戦争の事を尋ねると、額に青筋立てて激怒するお父さん。もしやお父さんは、今から80年前の太平洋戦争中の1944年8月22日に、沖縄から疎開する児童等を乗せて長崎に向かっていた「対馬丸」が、米軍の潜水艦から発射された魚雷の攻撃を受けて沈没した時に、日本海軍の護衛艦「蓮」か「宇治」の乗組員だったんじゃないの？

最初に心に引かなかったのは、私が40代の時に、お茶飲みながら終戦記念のテレビを視聴していた際、何気なくお父さんが呟いた「俺の乗った船の脇を、米軍の魚雷が勢いよく追い越して行って、後方にいた貨物船に命中して・子ども等が・。」と言ったきり、口をつぐんだ事が有ったよね。「貨物船」とか「子ども等が」とか可笑しな事を中途半端に言うと思ったけど「対馬丸事件」だと気付いたのはその10年後。

犠牲者は分かっているだけで1482人。魚雷攻撃を受けてみんな海に投げ出され、助けを求めながらも救助されず、親や先生の名前を呼んで亡くなった子ども達784人。日本海軍の護衛艦は、海に投げ出された人々を助けることなく長崎に向かったそうですね。そして箝口令が敷かれ、対馬丸事件や海軍の対応を決して人に伝えない事や、言ったら銃殺刑に処すると見張り迄付けられたそうですね。戦後60年経っても「対馬丸事件」の事を口に出せず苦しんでき

た当時の沖縄の人々の事を最近知りました。お父さんも彼らとは別の苦しみを味わって生きて来たんだよね。

上官の命令とは言え、多くの子達を見殺しにした自責の念にさいなまれ苦しんだ戦後。お父さんなりに平和を求め、身近な人々に温かい眼差しを向けてきたのを知っているよ。

戦争の話題に激怒するお父さんは、秘密にしておきたい凄まじい経験をしたんだね。国の為に隠された沈没船「対馬丸」の悲劇の全容は、80年たった今も、不鮮明だけど、今は口に出して言っても、私達家族が危険な目に遭う世の中ではなくなったからね。

生前、お父さんは、

「子どもは皆、可愛がられる為に生まれて来たんだ・。」と呟く事が有ったよね。そしてご近所さんの子ども達をとてても可愛がっていたよね。自分の子には厳しかったけれど、よそ様の子達には、温かい眼差しを向けてたのを、私は、鮮明に覚えているよ。

小学二年のある日の学校の帰り道、乱暴者のサブちゃんと言ウ君が、「朝鮮人、朝鮮人と馬鹿にするな。同じ釜の飯喰って、どこ悪い。」

と何度もリズムカルに囃し立てながら、同級生で朝鮮人二世のセン君をからかっている場面に出くわし、言い方や表情の滑稽さに思わず笑い転げた私。だから、夕食時にその話題を家族にしたら、お父さんは、箸を置き、

「朝鮮人は、好きで日本に来た訳ではない。無理やり日本に連れてこられた人もいる。祖国に帰り、親兄弟に会いたくたって思うように出来ない人だつて沢山いる。様々な都合で、日本人になろうと頑張って生きている人もいる。そんな人達を馬鹿にしては駄目だ。ましてや子どものセン君には何の罪もない。節子はこちらから二人に注意

しなかったのか？」

と問われた。叱られると思った私は、

「注意したけど、二人は止めなかった。」

と咄嗟に嘘をつき、父からの拳骨を免れた。

私が自分より年下の子と喧嘩したり、他人に自慢したり仲間外れに加担した事が父に知れると厳しく叱られた。なぜ、よその子にまで気にかけるのか不思議でならなかった。

また、バナナが珍しかった70年前、我が家では「便利屋」に頼んで、仙台からバナナを4本買って来て貰っていた。私と妹は1本ずつ、父と母は1本を分けて食べ、残りの1本は、次の日の私達姉妹のおやつになった。

このバナナを巡っても、忘れようとしても忘れられない出来事がある。

遠足の前日の夜、私は、遠足にこのバナナを持って行こうとリュックに入れたら、父が「リュックの中のバナナをどうする気だ？」と訊いてきたので、

「みんな、バナナを見たことがないというから見せてあげるの。」と応えたら、

「傍にいる友達に、一口ずつでも味見をさせるなら持つて行っていいけど、見せびらかして自分だけ食うなら置いていけ。」と不意を突かれた。私の本心を見透かした様に父は、

「誰しもが食べたいくなるような美味しそうな物を、独り占めして見せびらかして食べるのは、卑しいこと。心根が、貧しい証拠。」

と一喝。父の言ってる意味がスーッと心に入り、納得してバナナをリュックから出した。

恨みや嫉妬を残す行為は、猛毒。人の幸せを自分の事のように喜べる人間は、生きるのが楽しくなるし、それこそが平和への道だとお父さんは家族に教えたかったんだよね。

佳作

じぶんごとがつなぐ未来

北海道

井手隆太

「せんせい、オレ、死ねって言うのやめる」

廊下を歩いていたら、やんちゃな男の子が一人やつてきて、言った。社会の授業で、第二次世界大戦のことを勉強した後だった。

授業では、戦争が何年にあったか、どこであったか、教科書から読み取った。

「ここに書いてある」と、子どもたちは最初は人ごとであった。

原爆が投下され、焼け野原になった町に一人が立ち尽くす写真を子どもたちに見せる。

ガヤガヤしていた雰囲気が一変。テレビの画面に視線が集まった。

「この人たちは、この光景を見て何と思ったか。戦争とは…と、書きを書いてみよう」

『戦争は…もう嫌だ』

『戦争は…ひどい』

『戦争は…悲しい』

言葉がノートに綴られてゆき、次第に子どもたちの声が聞こえてきた。

「戦争って、最低だよな」「なんで戦争なんてしたのかな」と、普段の話し言葉での会話。

焼け野原に、二人が二組、あとは一人ずつの二人、合計四人が写る写真を見せた。

「二人は家族？ たぶん瓦礫になった家の中を探している」

「二人は家族が見つかったの？ 先生！」

「それは、わからない」と答えると、「私、家族がいなくなったら生きていけない」という叫びにも近い声が、教室に響く。

席を立ち、テレビの前で、写真を指さし、家族がいなか探す子どもたち。

第二次世界大戦では、世界の犠牲者は、約六千万人。日本の犠牲者は、三百十万人。日本の犠牲者一人をセンチとして考えて、道路に名前を刻んでいったとしたら、三十一キロの距離になる。子どもたちがいる学校から隣町までの距離。

そして、命は重いか軽いかと問うた。

「いままで読んだだけ、字だけで考えたならこんなに重いことだつて知らなかった。考えたからわかった」と、慎重に一人の子どもが口を開いた。

「九四五年八月十六日に戦争は終わった。昭和天皇の声をラジオで聞いて終戦を国民は知ったんだよ」と言うと、授業終了後、「聞きたい」と検索する子どもたち。

いつもは、ポップな曲が流れる給食の時間の教室は、玉音放送で包まれた。

「いま、クラスの中で嫌な思いをしている人がいると思う。だから、会議がしたい」

その日、五人の子どもたちが、立ち上がった。声を上げた。会議は白熱した。

「なにか嫌なことがあったら…私たちだけじゃなく、だれにでも言つてね」としめくくられた。みんなわだかまりがない表情であたたかい空気に包まれていた。

子どもたちが、知らなかった、知らないふりをしてきた戦争という事実が、ちいさな心に火を灯した二日になった。

『台所でおかあさんが、お昼ごはんの支度をしていました。原爆が落とされるまで、小さな女の子は、たしかに生きていて、家族と二緒にくらしていたのです。それでも、いたみは感じませんでした。涙や汗、土で顔がどるだらけになっても、気になりませんでした』

おちゃんや台所道具。小さな頭と数個の歯。おはしき。赤いボタン。長崎に暮らす竹下芙美さんが、亡くなった人の遺品や遺骨を拾い集めていた時に想像していたこと。爆心地公園を直すため、工事が始まった一九九六年に、素手で土を掘った。爪が欠け、血がにじむこともあった。

博物館のように、ガラス越しで見るとはなく、子どもたちが自由にふれられるように展示してほしい。

拾い集めた被爆品百点を、長崎の原爆投下の爆心地一・五キロにある、長崎市立新座小学校に寄贈した。芙美さんの母校であった。

『人に真実をつたえようとするなら、頭のなかで想像するだけでなく、目で見て、手でふれて、体をとおして体験することが、どれほど大切か』と芙美さんは、自らの言葉で実行し、未来につなげた。

私は子どもたちに見せたいものがある。赤い点が滲んだ小さく折り畳まれた四角い紙。

「これは、ひいおじいちゃんが戦争に行ったときのお守りだよ。じいは、これを持って自分の命を守った。これを渡したことは、次は私の命を守るつてことですよ。これ、あなたにあげる」と亡くなった祖母が言った。

「みんなが自分の子どもに残したいものは何ですか？」と、円になって、膝が触れあう距離で子どもたちに、ゆつくりと聞いてみたい。

昔を知ること、怖いかもしれない。

しかし、事実を知ること、動き出すことが確実にある。私は、子どもに近い、ひとりの大人として、きっかけを与え続けたい。

佳作

私たちと「戦争」

兵庫県

堀ほり

晴はる

日か

「先生、俺らも戦争に行く日が来るのかな。」

高校教員となって、五年目の春だった。当時担当していた日本史の授業で、生徒から尋ねられたその言葉が、忘れられない。

二〇二二年三月。そのころのニュースは、二月二十四日に始まったロシアによるウクライナ侵攻のことで持ち切りだった。ちょうど、三学期の授業で第二次世界大戦を扱ったばかりのタイミングだった。そこで私は、最後の授業でウクライナとロシアについて調べ学習をおこなうことに決めた。

高校生の彼らが、どれほど真剣にこの調べ学習に取り組んでくれるか、私はそれほど期待していなかった。普段聞こえてくる彼らの話題は、YOUTUBEで見た動画の話や、流行りのアニメの話ばかりで、ニュースや新聞などはまるで目にしているように思えなかったし、国際的な問題に興味を持っているとも思えなかった。

しかし、授業での反応は予想外のものだった。彼らはウクライナとロシアの戦争についてとても熱心に調べた。ウクライナの歴史、ロシアとの関係、今どんなことが起こっているのか、彼らはとても知りたがっていた。そんな中、ある生徒が私に言ったのだ。自分も戦争に行く日が来るのか、と。

その発言に対して、周囲の生徒の反応はまちまちだった。

「俺は戦争に行くなんて絶対嫌やな。爆弾とか怖いわ。」

「俺は戦争に行ってみんなを守るわ！家族とかが死ぬのは嫌や。」

そして、どの生徒も、こんな言葉を口にした。

「本当に戦争が起こるって、思っていなかった。」

ロシアによるウクライナ侵攻は、私たちの眼前に「戦争」という事実を突きつけた。生徒たちにとって、教科書の中の遠い昔の出来事でしかなかった戦争が、テレビやSNSを介して現実にあられたのだ。そしてそれは生徒に限ったことではなく、私も同じだった。

私は戦争を経験したことがない。戦争を経験した人が身近にいるわけでもない。小学生、中学生の時に修学旅行で広島と長崎を訪れたことはある。平和について学ぶ機会も多くあり、戦争の恐ろしさ、平和の尊さは頭では十分に理解していると思う。それでも、やっぱり私と戦争との距離は遠い。戦争は、ピントのずれた白黒写真を見ているような感覚で、鮮明には見えてこない。

そんな私が、高校の社会科の授業で戦争についてどのように教えるべきなのか。高校教員になってからずっと、考え続けていることだ。戦争について生徒にどう教え、何を伝えるべきか、教員となって八年経った今も試行錯誤している。私と戦争の距離は遠い。生徒と戦争の距離は、きつと、もつと遠いのだ。

一方で、意外にも生徒たちの戦争に対する反応はとても真剣である。これまでたくさんさんの生徒に戦争について授業をしたが、戦争のこととなると、生徒のまなざしが一変するように感じる。歴史なんて興味ない、と普段の授業では無気力な生徒も、授業の感想を一言しか書かないような生徒も、戦争について考える授業には熱心に取り組んでいる気がする。これは、教室で実際に教えてみないとわ

からない違いだと思う。彼らは戦争について知りたがっているし、考えようとしている。私は授業をするたびに、それに応えないといけない、と思う。

今年の三月、担当していた歴史の授業で、戦争について考える機会を設けた。第二次世界大戦、太平洋戦争の学習に加え、ウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナの問題もふまえて、生徒に「戦争はどうすればなくなるのか」と問うた。ある生徒は、「自分にできることは、戦争について学んだことを他の人にも伝えること」と言った。戦争の風化、記憶の継承が課題となっている。一方で、若者は知りたがっているし、伝えたいとも思っている。私は教員として、今を生きる生徒たちと歴史との橋渡しをしたい。戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて、これからも試行錯誤しながら、教え続けていきたい。「戦争はどうすればなくなるのか」という問いに、確かな答えはすぐに出ない。しかし、私たちは考え続けなければならない。考えることをやめてはいけない。

今年の最後の授業で、生徒が感想として書いた言葉が心に残っている。

「歴史は戦争ばかりだと思った。未来の高校生が学ぶ歴史が、こんな戦争ばかりの歴史にならないようにできたらと思った。」

今、五月に生まれた息子の寝顔を胸に抱きながら、何度もその言葉を思い出す。あなたの生きていく未来が、平和で幸せなものでありますようにと、切に願う。

佳作

二つの命日(亡き父の手記より)

島根県

松^{まつ}下^{した}明^{あきら}

父の命日は、平成二十五年三月十七日です。松江市内の病院で、家族に見守られての安らかな旅立ちでした。享年八十六歳でした。

その父には、もう一つ、他者から一方的に自分の命日を告げられたことがあります。その日は、昭和二十年八月十三日。出撃命令です。目標は木更津沖、太平洋上の米国艦隊。八百キログラムの爆弾を抱え、日本海軍の彗星四三型艦上爆撃機とともに、体当たりで米艦隊を撃滅せよとの命令。「特攻」です。

当時、出撃命令を受けた父は愛機を触りながら、「海軍は、えらく高い棺桶を俺に準備したもんだな。」と戦友や整備兵に語ったと、晩年に話してくれました。

物事を斜めから見ても、冗談か皮肉か分からない事を口にする誠に父らしい言葉だと、その時感じたのです。命令が下った当時の父の心中を察すると、精一杯の「強がり」の一言だったのでしょう。

手元に、父の退職後の平成三年頃に、当時の出来事や心情を書き記した膨大な手記があります。(以下、父の手記より部分抜粋)

木更津東方、敵機動部隊に対し、第三航空艦隊攻撃第三飛行隊最後の切り札として、索敵攻撃、五十四機全機特攻をかける。一番機反復攻撃。二番機、三番機特攻。成功を祈る。一語、一語、肺腑をえぐる万感の思いを込め、そして、力強く、ゆっくりと、今生との

引導をわたされる。天空の一角を仰ぎ涙でぬれた司令官の声。

一瞬我が脳裏に、父母の面影が稲妻の如く駆け巡る。又胸中には、生きたい、生きたい未だ俺は花の蕾の二十才だ。切々と生への執着心が湧き上がる、と同時に死なくなてはならないのだ。死ぬために訓練をしてきて、海軍きつての最新鋭、彗星艦爆で今がその好機、雲染む屍と覚悟した俺だという、使命感との葛藤は続く……。なおも悶々と・・・。

訣別の帽振れの合図に送られて、トラックに乗り愛機の分散している飛行場へ向かう。二番機搭乗、試運転に入る。異常なし。整備下士官より、爆弾の安全栓を抜き取り、赤札のついた安全栓を受け取る。さあ、何時でも爆発する態勢である。

赤ブーストレバーを引いての離陸。八百キロ爆弾を搭載しているので、中々離陸速度に達しない、やっと地を離れ浮き上がる、即一番機を目指して二番機の定位置につき編隊飛行にはいる。三番機もつき、進路を東にと渥美湾上に出る。

太平洋上遙か彼方は、気持ちの悪い程黒くなっている。この世での見納めと薄れ逝く青き山々の日本本土に別れを告げる。

スコールだろう前方の黒い空、計器飛行に入る心の準備をする。

暫く飛行を続けると、急に一番機が左右に翼を振る、バンクをとっている、すわ敵機かと見張りに目を凝らすと一番機から隊内電話で、「天候不良引き返せの基地からの電信あり」「只今より帰投する。」

八〇番を抱いての着陸は脚を折るので、編隊を解いて一列で旋回しながら太平洋上に落とす。急激に機体が軽くなり、浮き上がる高さに驚嘆しつつ帰投する、全機次々着陸し指揮所内で搭乗員は地上待機となる。

「何故行けないか」と憤懣やるかたない雰囲気の中で、その反面再び生を得た安堵感のただよう中、喜怒哀楽がすぐ顔に出る小生は、尻をひねりながら、その雰囲気にあわせるのに苦勞した。

待機姿勢は、飛行場に夕闇迫る頃まで続く。翌十四日と、十五日は飛行場にて待機となり、十五日は正午士官室前、搭乗員集合となる。終戦玉音放送のラジオを聞くも、雑音多く聞き取れない……。 (以上、父の手記より)

こうして終戦。父は、「生と死の喜びと悲しみ」を、昭和二十年八月十三日に同時に味わったのです。そして、当時の心境を、父ならではの視座で赤裸々に綴っていたのでした。

片道分の燃料しか搭載しない特攻機です。出撃基地と米国艦隊の中間地点より手前で、この入電がなければ、母と巡り会うこともなく、私はこの世に存在しなかったのです。父は、戦後の日本の復興のために当時の大切なエネルギー産業である「石炭産業」に従事しました。そして私は、福岡県の筑豊地方で、この世に生を受けました。真っ黒になった顔と坑内服、そしてヘルメットで坑内から出てくる父の姿を、偶然、小学校の下校途中に目にするがありました。父の一生懸命さが、子どもながらに痛いほど伝わってきました。大空から地下への命がけの転進でした。

父の残した手記は、これからの若い世代へ託された平和と命のバトンです。このリレーは決して絶やしてはなりません。この原稿を書き終えると、三月に誕生した初孫に会いに、妻と一緒に東京へ出かけます。羽田上空から見る木更津沖の空は、きっと快晴でしょう。

第34回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

富田 そら	どうやったら「如己愛人」になれるかな	島根県	雲南市立三刀屋小学校	最優秀賞
原 七 菜	そばにいてくれてありがとう	島根県	雲南市立掛合小学校	優秀賞
藤 飛 結 翔	ことばのかがみ	島根県	雲南市立掛合小学校	佳 作
藤 原 瑠 々	ことばを大せつにするってどんなこと	島根県	雲南市立鍋山小学校	佳 作
石 倉 悠乃介	ぼくのスーパーヒーロー	島根県	雲南市立鍋山小学校	
石 飛 光一朗	町たんけんで考えたこと	島根県	雲南市立三刀屋小学校	

【小学生高学年の部】

黒 木 太 陽	「許し」	東京都	目黒区立田道小学校	最優秀賞
田 柄 涼 風	人とのつながりと大切な思い	島根県	雲南市立掛合小学校	優秀賞
金 子 蒼 楨	届けよう折り鶴と愛	長崎県	長崎市立山里小学校	佳 作
吉 谷 奏 音	お祈りならどこへでも	東京都	星美学園小学校	佳 作
藤 原 依央梨	生きるって当たり前じゃないな	島根県	雲南市立三刀屋小学校	
有 元 紬	思いやりと笑顔	島根県	雲南市立掛合小学校	
堀 江 亮 二	平和を願って	島根県	雲南市立田井小学校	
女 鹿 田 杏	日々の生活から考えた平和	島根県	雲南市立佐世小学校	
森 脇 歩 花	助け合い	島根県	雲南市立三刀屋小学校	
森 脇 美 緒	「考えの違い」	島根県	出雲市立四絡小学校	

【中学生の部】

藤 井 響 平	敵も味方もない平和への道標	鳥取県	米子市立後藤ヶ丘中学校	最優秀賞
片 岡 睦 深	平和へのバトン	島根県	島根大学教育学部附属義務教育学校	優秀賞
寺 西 一葉梨	14歳の私に出来ること	東京都	玉川聖学院	佳 作
四 辻 佳 穂	「愛」を胸に新たな一歩を踏み出す	広島県	盈進学園盈進中学高等学校	佳 作

池城咲花	ぬちかじり平和を守る	沖縄県	石垣市立石垣中学校	
神谷汐莉	沖縄から平和の花を	沖縄県	糸満市立西崎中学校	
城間麻央	沖縄の未来、世界へ発信	沖縄県	南城市立玉城中学校	
ピラットウ瑛	息子として	沖縄県	糸満市立西崎中学校	

【高校生の部】

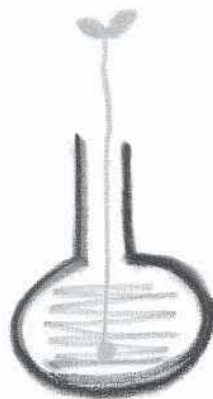
平野 宏太郎	飛行機に乗って戦争のことを考えた	北海道	北嶺高等学校	最優秀賞
陸 颯太郎	祖母の言葉	東京都	セントメリーズインターナショナルスクール	優秀賞
仲宗根 早紀	この命を懸命に生きて	沖縄県	KBC高等学院	佳作
松葉 悠乃	「生きていてよかった」と思える日	広島県	盈進学園盈進高等学校	佳作
村上友理	託された未来に向かって	兵庫県	関西学院高等部	
難波 大地	戦争と愛と平和	島根県	島根県立三刀屋高等学校	
水内 祐樹	助け愛	島根県	島根県立三刀屋高等学校	

【一般の部】

前田 有美	おいたんのこと	岡山県		最優秀賞
古瀬 節子	秘密を抱えた父の教え	山形県		優秀賞
井手 隆太	じぶんごとがつなく未来	北海道		佳作
堀 晴日	私たちと「戦争」	兵庫県		佳作
松下 明	二つの命日（亡き父の手記より）	島根県		佳作
池田 裕一	生まれた家は空襲で焼けて	大阪府		
小林 香	平和は誰から始めるの？	長崎県		
猿木 浩二	永井博士のように人を思い、人に尽くそう	島根県		
菅沼 博子	平和を願って	愛知県		
高瀬 昭子	まず家族	愛知県		
林 晃弘	優しさと思いやりと愛と―少年院での授業を通して開かれた心の窓―	兵庫県		



NO



YES

KU
2007. 8. 26